

血

このぼくという在り方において
最も重要なことは
こうして文字を綴ることに他ならない
ノートに向かいペンを走らせるということは
即ち 自身を産み落としていくことに他ならない
染み込んだ このインクの分だけ
ぼくは生きることができる

それ故に断言できる
一度たりとも
薄汚れた上着の中に自身を置いたことはない
ただの一度も
愛想笑いの渦中に自身を置いたことはない

常に ぼくは潜り込む
俺という媒介物の奥深くで
言葉を紡ぐ為

1993_1997 日詩篇Ⅱより